



ジャーナリストの視点 —何を聞いて、どう読者に伝えるか

2010年度 第4回 2010年10月14日(木)

講師:野中 章弘 アジアプレス・インターナショナル 代表

【学習目標】

ジャーナリズムの基本と、写真や映像資料の作り方を学び、NGOの広報に活かす。

ジャーナリズムの基本

1. 自分が何を知りたいかを知ること
2. 自分の知りたいことを誰が語ってくれるかを知ること

取材でのインタビュー前の準備

1. 資料やその人の経歴を調べる
2. 質問項目を整理する

新聞やテレビ局へのアプローチのコツ

テレビや新聞は記事にしやすい形になっていれば、取り上げてくれる可能性が高くなる。ポイントをきちんと示して送ってあげると記者は記事にしやすい。相手はどのような形で情報を提供されればうれしいか、ということを考える。国際面で取り上げてほしい場合は、例えばフィリピンで何が起きているかをポイントにする。社会面なら、日本人とフィリピンの関係、日本人がボランティアに行った、など。家庭面なら、フィリピン人女性の活躍、子どもと医療など、取り上げられやすい切り口を考えておく。

Eメールで記事を送る場合は、見出しのつけ方が鍵。最初の数行にポイント事項を入れれば、最後まで読む可能性がある。送ったメールを100人が無視しても、1人が記事にしてくれたら意味がある。また、一度コンタクトした記者とは日常的に連絡を保つ。朝日新聞社には2千数百人の記者がいる。子どものことをよく書いている記者がいれば、その記者の名前を控え、リスト

を作っておく。一度送ってみて取り上げられなかったとしても、何度も情報を送ることで、記者から連絡をくれる場合もある。

企画書やプレスリリースは、なるべく短いほうがよい。目的、内容、構成含めてA4で1枚。1枚でコンパクトにまとまらないものは「まとまっていない」と思われる。



実際の映像を見ながら、活発な議論を行った

記事や番組の素材としての映像

NGOの広報に映像を活用したらよいと思う。動画の映像があれば、テレビやホームページ(ウェブサイト)でも使うことができる。テレビ局のディレクターは関心があってもNGOの活動を撮るのにフィリピンまで行くことは難しい。基本的な映像があれば、

頭の中で構成ができる。「明日のニュースがない」という場合、映像があれば「フィリピンの話でもしてみようか。映像もあるから」ということになるかもしれない。

プロの撮り方とは

取材の際、われわれは3つのことを同時に行う。インタビューしながらメモを取り、ビデオを撮り、写真を撮る。カメラは基本的にはズームを使わない。アップを取りたいければ50センチくらいまで近づいて撮る。この講義の写真であれば、いすに乗って、前から角度を変えて全体を3枚、講師が話しているところ、聞いているところ、書いているところ、講師が板書しているところを撮る。

ビデオの場合、自分が動くことで躍動感が出る。ずっと座っていると、画面の緊張感がなくなる。構図を決めてから撮り始め

る。1分で10カット必要となると、全体を6秒、一人ひとりの映像を6秒などと6秒ずつ違うものを10カット組み合わせる。

プロはなんのために撮るのか、という目的が明確。何に使うのかを考え、無駄のないフレーミングを心掛ける。記録目的なら、ビデオである必要はない。せっかく撮っても使えない映像が多くなるのは、何のために撮っているかが明確でないからだ。報告用に5分間のビデオを作る、などという目的を設定して、ビデオ撮影、編集の練習をするといい。